

藍住町の民家

----- 民家班（日本建築学会四国支部徳島支所） -----

酒巻 芳保*¹ 井河 明子*² 植村 成樹*³ 喜多 順三*⁴ 高田 哲生*⁵ 田村 栄二*⁶
 林 茂樹*⁷ 姫野 信明*⁸ 根岸 徳美*³ 板東 毅*⁹ 広田 和正*¹⁰ 福田 頼人*¹¹

1. はじめに

藍住町は、南は徳島市、北は板野町、鳴門市、北島町に隣接し、徳島県の中央を流れる吉野川の下流北岸に位置する。旧吉野川と吉野川に囲まれているため、たゆまぬ吉野川の沖積によってできた平坦地で、海拔はわずか5.17m、山がまったくない。

かつては藍の栽培が隆盛を極め、近年では肥沃な地味と温暖多湿で水利の便に恵まれた条件を生かし、全国有数の春夏ニンジンの産地となっている。一方、徳島市に近接する立地から、市街化の進展も著しい。

藍住町の民家に関する資料は少なく、昭和48～50年に徳島県下全域で実施された民家緊急調査も、藍住町では実施されていない。昭和60年、63年に教育委員会により「奥村家建物実態調査」が行われているが、町内全域を対象とした民家調査は今回が初めてとなる。

2. 調査の目的と方法

1) 調査の目的

一般に民家は、住屋形式により農家と町屋に大別することができる。藍住町では、町屋形式の民家を確認することができなかつたため、農家形式の民家を対象に調査を行うこととした。

農家形式の民家は、屋根形式により茅葺き民家と瓦葺き民家に大別できるが、前者は町史にも記されているように、一般的な形式として町内に広く存在していた。また、瓦葺き民家は奥村家（文政6年

(1823)～文久2年(1862))のような藍師の住居として、江戸末期以降に建設されていることが分かっている。

今回の調査では、一般庶民の住居として広く存在していた茅葺き民家に着目し、藍住町の民家の特徴を明らかにすることを目的とした。尚、特徴を把握する上で、周辺市町村の既存調査結果との比較検討も行った。

No.	地図ページ		調査日 年 月 日		
所在地			写真番号		
名称			屋根形状		
屋根仕上			棟の造り	四方 他()	
棟の造り			下屋形式	間口 間×奥行 間	
勝手	右 左 他()	寸法	間取		
玄関	有 無 他()	間取	主屋方位		
建築時期			利用形態	居住 空家 他()	
敷地形状	平坦地 傾斜地(向)		利用形態	居住 空家 他()	
外観印象	・建築当初の姿を残している ・改造している ・老朽化が激しい ・その他()				
付属建物	厩 納屋 蔵		その他()		
備考					

図1 調査票

*1 徳島県建築士会 *2 戸塚元雄建築設計事務所 *3 UN建築研究所 *4 空間計画研究所 *5 高田建築設計
 *6 穴吹カレッジ *7 林建築事務所 *8 (有)メビウス *9 佐藤企画設計 *10 (株)大林組 *11 くすの木建築研究所

2) 調査の方法

一次調査として、町内全域の茅葺き民家を対象に悉皆的調査を行った。その後、特徴的な民家を対象に詳細調査を実施した。詳細調査は茅葺き民家以外に、江戸末期に建築された瓦葺き民家も対象とした。

一次調査では、調査票（図1）をもとに、建物の方位や規模（間口・奥行寸法）、平面形式（間取り・勝手位置・玄関の有無・下屋形状）、敷地形状等を調べ、聞き取りによる建設時期の確認に努めた。

詳細調査では、ヒアリング、実測（配置、平面、断面図等の採取）、写真撮影を行い、ヒアリングからはその家の歴史や部屋の利用方法、暮らしの変遷などを明らかにし、実測調査、写真撮影では現在の姿を詳しく記録することによって、それぞれの民家の成立背景や、時間経過に伴う変化を含めた実態を、総合的に捉えることができるように努めた。

3. 茅葺き民家の分布状況

町内で59軒の茅葺き民家を確認することができた（図2）。茅葺き民家の残存状況を確認するため、総世帯数の茅葺き民家が占める割合（茅葺き民家率）をみると、藍住町は0.59%と徳島市の0.40%は上回るもののかかなり低く、市街化の進展により、茅葺き民

家が激減していることが読みとれる。

大字別では、奥野22軒、徳命11軒、東中富9軒、富吉3軒と旧藍園村地区に比較的多い。旧住吉村地区では矢上6軒、乙瀬6軒、住吉2軒となっており、市街化の進展が著しい勝瑞や笠木では1軒も確認することができなかった（図3）。

表1 茅葺き民家率

市長村名	茅葺き民家率	茅葺き民家数	世帯数	備考
藍住町	0.59%	59	9,925	2005年調査
石井町	3.25%	262	8,063	2004年調査
鳴門市	0.78%	195	24,841	2003年調査
徳島市	0.40%	422	104,891	2001年調査
旧土成町	10.70%	251	2,346	2000年調査

茅葺き民家数は空き家を含む、世帯数は2000年国調データ

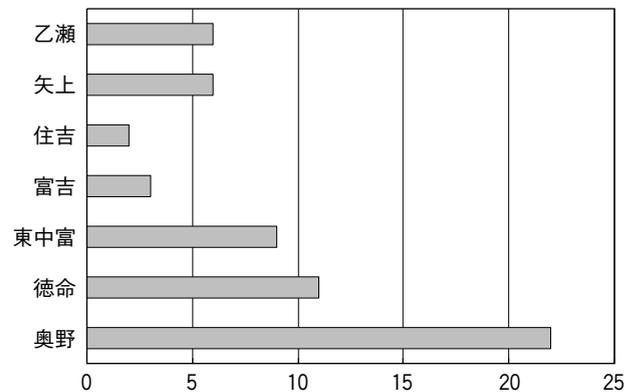


図3 大字別茅葺き民家数

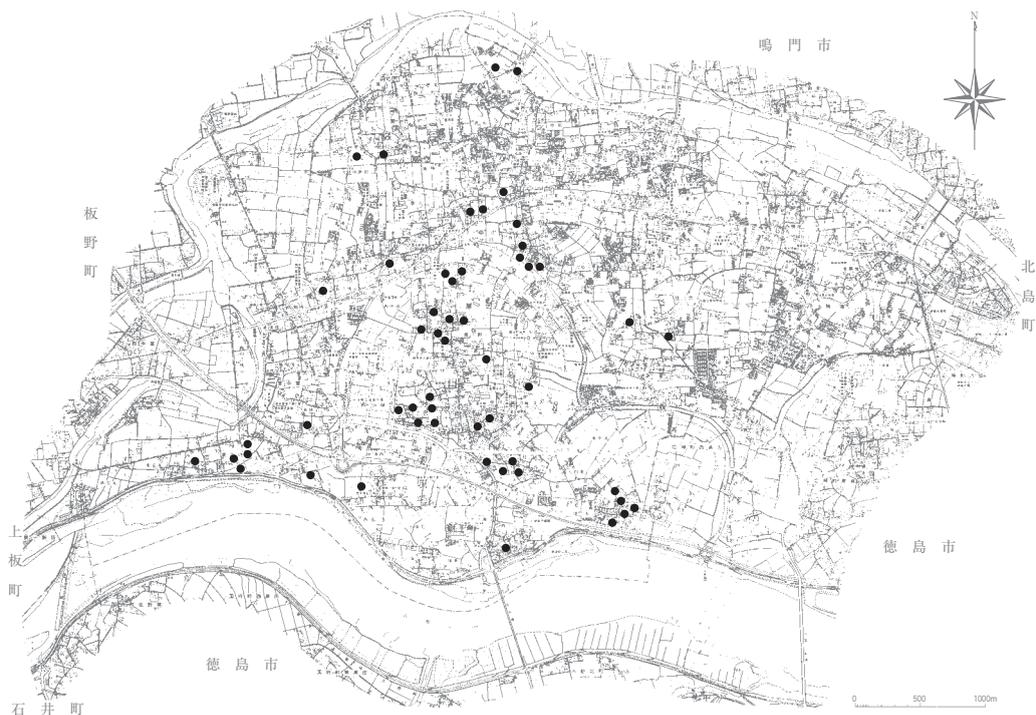


図2 茅葺き民家の分布

表2 詳細調査民家の概要

記号	所在地	屋根形式・階数	間口	奥行	間取り	建設時期	備考
A	奥野	茅葺き・平屋建て	5.0	4.0	左勝手四間取	江戸末期	
B	奥野	茅葺き・平屋建て	6.5	5.5	右勝手四間取	明治20年頃	
C	奥野	茅葺き・平屋建て	7.0	5.5	右勝手四間取	明治5年(棟札)	
D	乙瀬	茅葺き・平屋建て	8.0	5.0	左勝手六間取	江戸末期(家相図)	
E	富吉	瓦葺き・2階建て	9.5	6.5	右勝手六間取	不明	茅葺きの小屋組を改造
F	奥野	瓦葺き・2階建て	8.0	4.0	左勝手四間取	江戸末期	

4. 詳細調査対象民家

詳細調査を実施した民家は表2に示す6軒である。内訳は茅葺き民家が4軒、茅葺き民家の小屋組を改造し瓦葺き2階建てとしたものが1軒、創建当初より瓦葺き2階建てのものが1軒である。

5. 茅葺き民家の概要

一次調査の結果をもとに明らかになった藍住町の茅葺き民家の特徴は以下の通りである。

1) 屋根仕上げ

屋根の仕上げをみると、茅葺きのままのものを1軒確認することができた。茅葺きの上にトタンを巻いたものが圧倒的に多く57軒である。それ以外には、小屋組を改造し2階建ての瓦葺きにしたものが1軒あった(図4)。

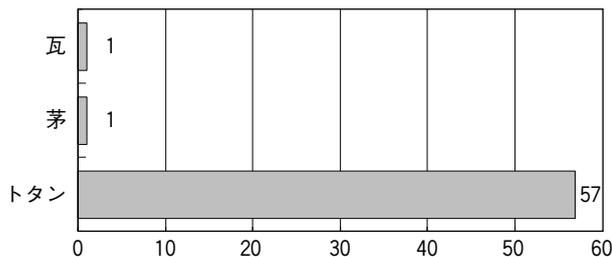


図4 屋根の仕上げ

2) 下屋形式

周囲に下屋を設けない葺きおろし形式の民家を確認することはできなかった。

茅葺きの上屋の四周に下屋を設けた四方下(しほあげ)と呼ばれ形式の民家が最も多く42軒、全体の8割弱を占める。それ以外では、三方が8軒、二方が4軒、一方が5軒となっているが、いずれも正面側に下屋が設けられている(図5)。

四方下は徳島市、石井町や旧土成町(現吉野川市)

にも多く、吉野川中下流域に位置する茅葺き民家の特徴の一つとされるが、藍住町においてもこの特徴を確認することができた(図6)。

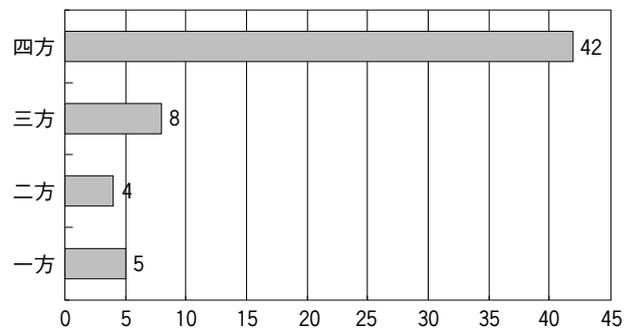


図5 下屋の形式

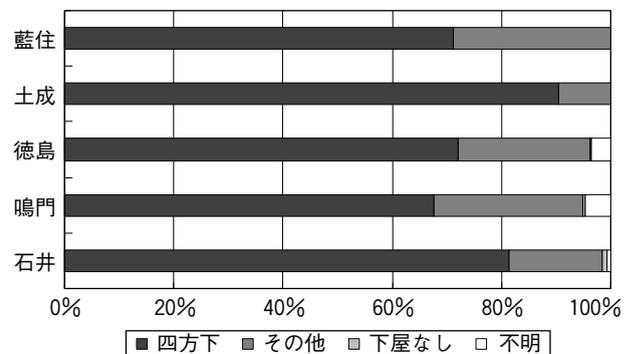


図6 下屋形式の比較

3) 利用状況

茅葺き民家の利用形態をみると、7割弱の40軒が住居として利用されている。いずれの民家も下屋部分を内部化するなどの改造をしており、創建当初の形態を残すものはほとんどない。

空き家となっているのは13軒で全体の2割強である。その他の利用形態としては納屋4軒と店舗が2軒ある(図7)。

4) 建設時期

聞き取り等により建築時期が確認できたのは18軒

であった。このうち棟札で建設時期が確認できたのは1軒のみであった。

時期別で見ると、江戸時代3軒、明治5軒、大正4軒、昭和6軒（戦後1軒）である（図8）。

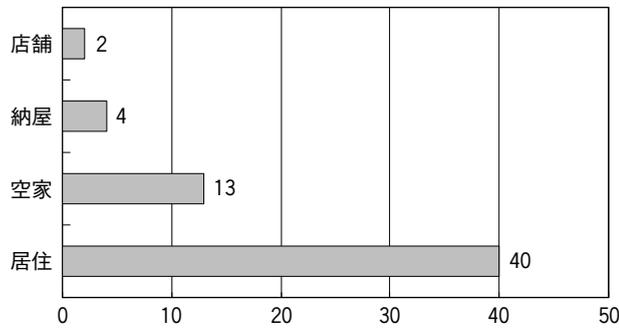


図7 茅葺き民家の利用形態

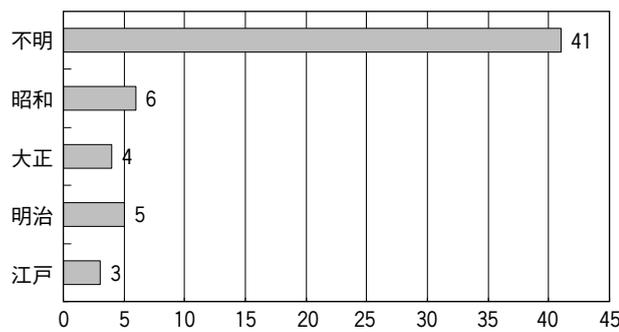


図8 建設時期

5) 主屋の方位

主屋の向きは南向きが最も多く54軒、全体の9割以上を占める。西向きの3軒と東向きの1軒は、ともに納屋として利用されているが、主屋との位置関係や建物の形態を見ると、当初から納屋として建設されたものと考えられる。北向きの1軒は住居であるが、立地や敷地形状から農家の住居ではないと思われる（図9）。

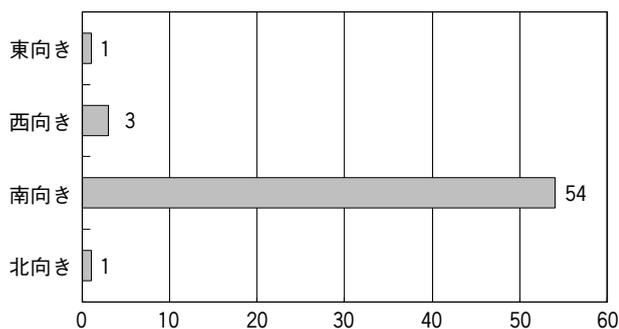


図9 主屋の方位

主屋が南向きに建てられるのは、地形の制約を受けない平野部の民家の特徴であり、平野部の多い他の市町でも同様の傾向を示している（図10）。

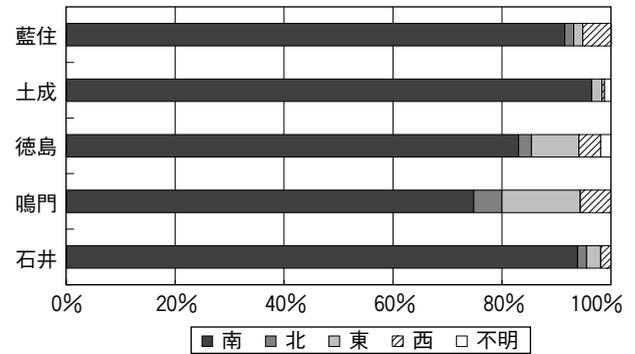


図10 市町別主屋の方位

6) 間取り

調査により、間取りが確認できたのは約半数の27軒であった。

そのうちの9割弱の23軒はドマ部分と田の字型の座敷を有する「四間取」であり、県内の茅葺き民家に共通する傾向を示している。他は三間取が1軒と六間取が2軒であった（図11）。

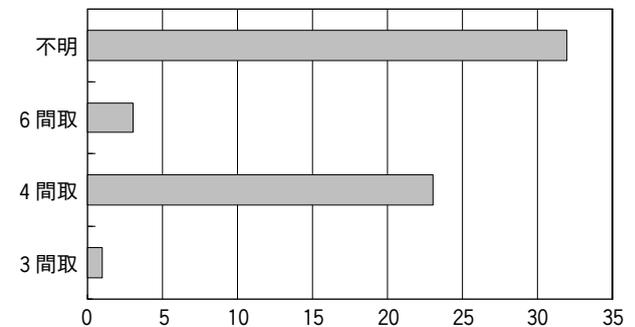


図11 主屋の間取り

7) 勝手の位置

茅葺き民家のドマに通じる出入口の向きが正面から見て、右にあるものを右勝手（図12）、左にあるものを左勝手（図13）という。藍住町の茅葺き民家の場合、右勝手が39軒、左勝手が16軒となっており、右勝手が多い。

大字別で見ると、旧住吉村の住吉や乙瀬では右勝手と左勝手がほぼ同数であるが、他の地区では右勝手が多い（図14）。

建設時期別に勝手の位置をみると、江戸時代は全



図12 右勝手の民家



図13 左勝手の民家

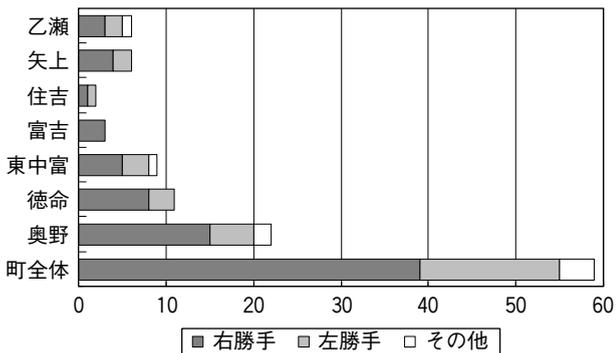


図14 大字別勝手の位置

て右勝手、明治は右が3軒、左が2軒、大正では右が3軒、不明が1軒、昭和は右が4軒、不明が2軒で、いずれも右勝手が多い(図15)。

周辺市町と比較すると、下屋形式や主屋の向きなどで共通点が多かった旧土成町や石井町では、左勝手が圧倒的に多いが、藍住町では右勝手の方が多く、同じ吉野川流域であるものの、勝手の位置に関して

は、異なる傾向を示している(図16)。

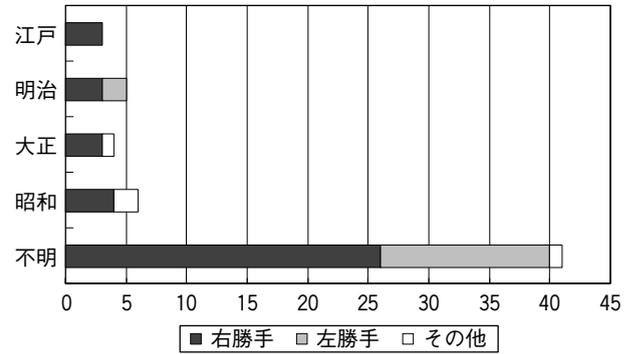


図15 建設時期別勝手の位置

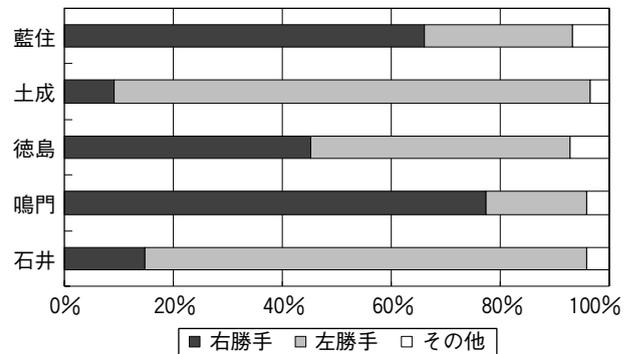


図16 市町別勝手の位置

玄関構え(図17)と呼ばれる接客専用の玄関を有する民家は1軒もなかった。



図17 玄関構えの民家

8) 建物規模

規模を間口の寸法で見ると、5間と7間が最も多くいずれも16軒となっている。次いで6間の11軒であり、5~7間に集中している。

間口4間未満が5軒あるが、このうちの3軒は納屋である(図18)。

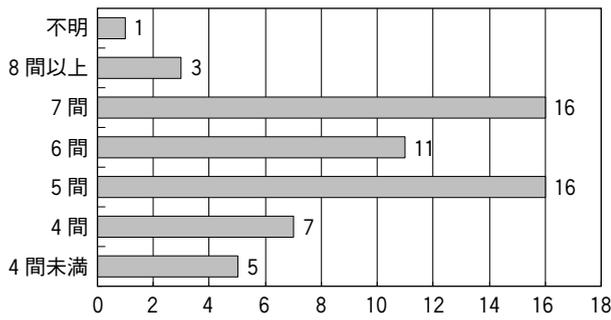


図18 建物規模（間口寸法）

他市町と比較すると、間口が4～5間の比率は余り変わらないが、7間以上の規模の大きい民家の占める比率が高い。一方、4間未満の小規模なもの占める比率も高いが、これは先述の通り、ほとんどが納屋である（図19）。

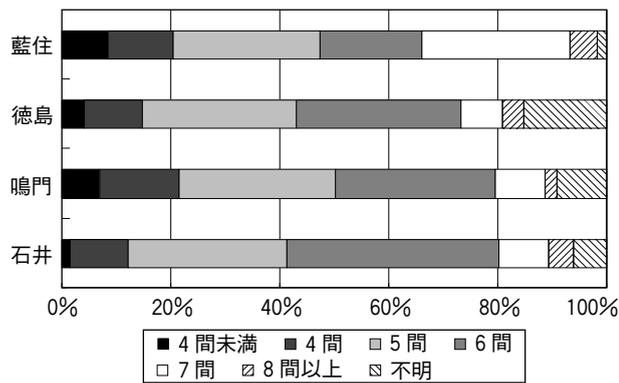


図19 建物規模の比較（間口寸法）

9) 部屋の呼び方

1次調査のヒアリングで各部屋の呼び方を確認した。確認できた民家の間取りは、ほとんどが四間取であったため、ここでは四間取に限定して述べることにする。

「オモテ」と「オク」は殆どの民家で使われている呼び方であり、また徳島県下全域の四間取民家に共通している。

「オモテ」と「ドマ」（「ニワ」ともいう）の間の部屋の呼び方は「ミナミザ」「チョウバ」「ナカノマ」等と3通り以上あった。県内では「ナカノマ」と呼ぶのが多いが、藍住町では「ナカノマ」は少なく、「ミナミザ」が最も多かった。「チョウバ」や「ミナミザ」は吉野川対岸の石井町でも多く使われている呼び方である。

「オク」と「ニワ」の間は「ナカノマ」「キタノ

マ」「キタザ」「キタノナカノマ」など多くの呼び方が使われている。県内では「チャノマ」が多いが、今回の調査では1例も確認できていない。「キタザ」は石井町でも多くみられる。尚、「ミナミザ」と「キタザ」は対で使われることが多い（図20）。

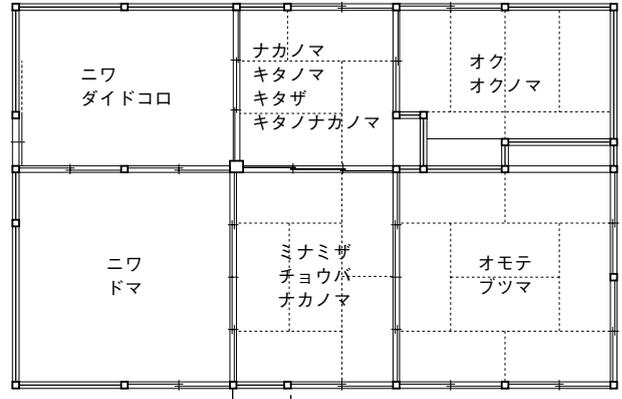


図20 四間取民家の部屋の呼び方

6. 屋敷構えの特徴

1) 敷地

藍住町は標高5m以下の平坦地に位置しているため、民家の建つ敷地も平坦地にあり、その形状は矩形が多い。相次ぐ吉野川の洪水に対する備えとして、敷地外周には青石や撫養石による石垣が積まれ、地盤面を高くしている（図21）。

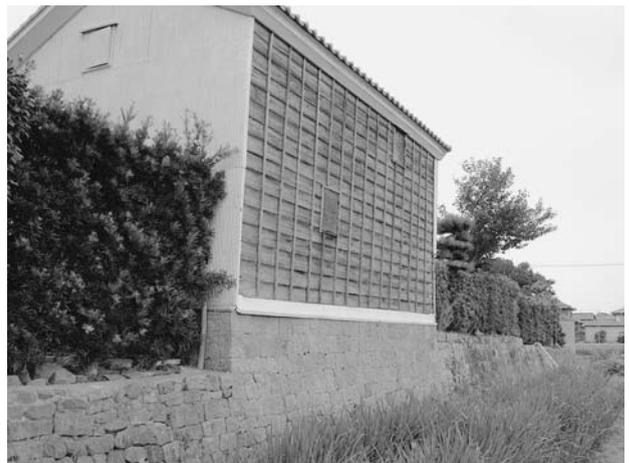


図21 敷地外周の石垣（D家）

2) 屋敷内の建物配置

主屋は敷地奥に南面して配置されるものが多く、母屋前面に農作業のための広い庭が設けられ、その庭を囲うように蔵や納屋、藍の寝床などの付属施設が建てられている。

3) 付属施設

①長屋門

道路に面して長屋門を設けている民家はかなりある。長屋門は敷地の接道状況により異なるが、南面や東面に設けられているものが多い(図22)。



図22 長屋門 (F家)

②灰屋

灰屋と呼ばれる付属舎を何棟か確認することができた。藍作が盛んだった頃、藍師の家では繁忙期の食事の準備に大量の灰が出たが、火災への備えから灰の貯蔵庫を敷地の外れに造った。壁は石造、屋根は瓦葺きの小規模な建物で、県内の他地域では余り見ることができない(図23)。



図23 灰屋 (E家)

③厩

以前は農耕馬を飼育していたため、厩が多くあったといわれる。今回の調査では2棟の厩と、1軒で長屋門の一部が厩に使われていたことを聞き取りで確認するにとどまった。小規模な建物であり、他の

用途に転用することができず、取り壊されたものと思われる(図24)。



図24 厩 (B家)

④藍寝床

藍の寝床は数多く残っている。瓦屋根のものがほとんどであったが、茅葺き屋根のものも1棟あった。いずれも庭に面して奥行き深い下屋を設けている。藍作が余り行われなくなったため、納屋として利用されている(図25)。



図25 藍寝床 (F家)

⑤その他の付属施設

蔵やタバコの乾燥小屋などを確認することができた。蔵は主屋の乾(北西)方向に建てられているものが多い。

4) 家相図

今回の調査では2軒で家相図を見ることができた。いずれも明治期に作成されたもので、敷地内の建物配置やそれぞれの建物の間取りが正確に描かれた上、母屋を中心に鬼門などの方位が記入されてい

る。新築や増築の際に参考にされたものと考えられる（図26）。

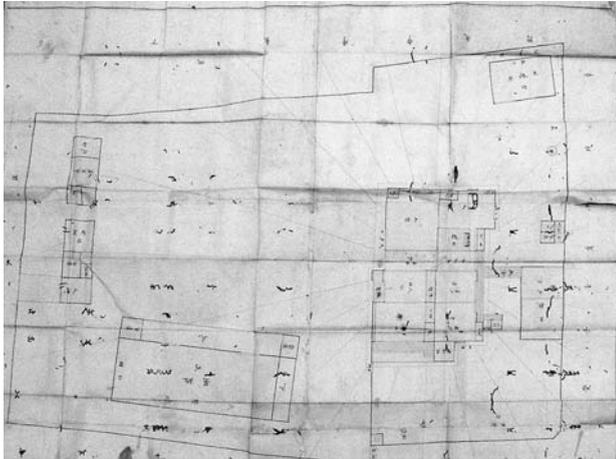


図26 家相図

7. 詳細調査民家の概要

1) A家

南北に広い当家の敷地内には、5つの建物がある。敷地の北側中央には主屋、東側に昭和47年に増築した住居、西側に納屋、南側に車庫、中央に牛舎（現在は倉庫）が配置されている。

主屋の建設は聞き取りにより、江戸後期のもので、間口5間×奥行4間である。間取りは当初、左勝手四間取であったと思われるが、改築により大きく変化している（図27）。

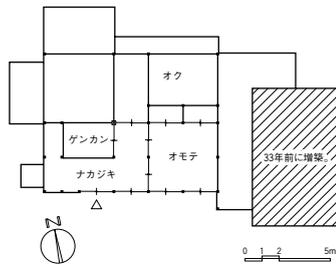


図27 A家平面図



図28 A家主屋外観

屋根は吉野川の葎よしを使用しており、昭和40年頃にトタンを巻き、平成9年には再度トタンを被せ、下屋部分の垂木、下地、瓦を替える工事を行っている。正面の建具は全てアルミサッシに変わり、東西の下屋部分は増築されているが、外観に変化は余りなく、当時の姿がうかがえる（図28）。

2) B家

庭を中心に北側に主屋を、東側と南側に納屋を配置する。南側の納屋は茅葺きに鉄板を巻き、3方に本瓦葺きの下屋をまわす。これらの納屋はかつて藍寝床として使われていた。また、東側納屋の北側には厩が残っている（図24、29、31）。



図29 B家主屋外観

主屋の建築は、聞き取りによると明治20年頃であり、茅葺きに鉄板を巻いたのは昭和50年頃という。右勝手四間取であるが、「ドマ」部

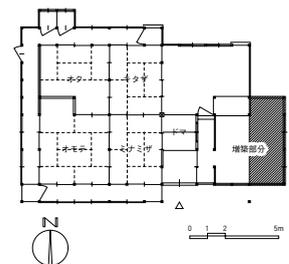


図30 B家平面図



図31 B家納屋（元藍寝床）

分は板間に改造され、かつてあった「ヒロシキ」も取り除かれている。南側の広縁と東側の一部は後からの増築である。基礎には撫養石が使われている(図30)。大正元年の洪水では床上10cm程の水害に遭ったという。

3) C家

主屋は間口7間×奥行5.5間、右勝手の四間取である。南面にはアルミサッシがつけられるなど外部に多少の改造が見られるが、内部の改造は少ない(図32、33)。土間には天井が貼られておらず、小屋裏が確認できた。寛政10年(1798)と明治5年(1872)の棟札があり、主屋は明治5年の建設とみられる(図34)。

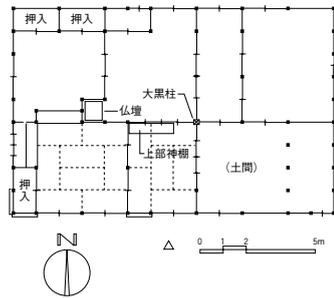


図32 C家平面図



図33 C家主屋外観



図34 棟札

C家には2枚の家相図が残されている。一つは明治4年(1871)のもので、棟札よりも1年前であることから、建て替えの際に家相を調べたものであろう。もう一つは明治26年(1893)のもので、付属舎の建設か庭の整備のために調べたものと思われる。

4) D家

屋敷構えは、広い敷地のやや北側中央に主屋があり、その北側に蔵、南東に息子夫婦の離れ、南側の道路沿いには長屋門を配する(図35)。南東の離れの位置にはかつて間口9間の藍寝床があり、厩を兼ねていた長屋門の西側に並んで倉庫と灰屋があった(明治5年の家相図より)。また、屋敷内に合計5つの中門があったとのことであるが、現在は主屋の東に1カ所残っているだけである。屋敷地は1.1mほどの石垣を築いて地盤を高くし、北側の旧吉野川の氾濫に備えていたことが伺える。

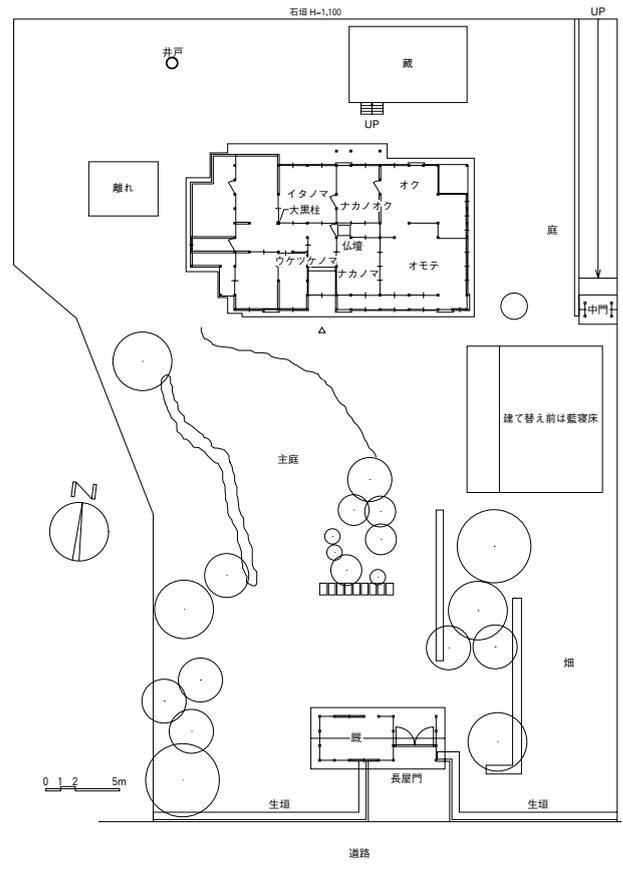


図35 D家配置図

主屋は当初、間口8間×奥行5間ほどであったが、玄関の改造や西側部分の増築などを行い、昭和27年頃現在の主屋の大きさとなった(図36)。

間取りは、左勝手六間取であるが、かつて「ナカノマ」には客用の玄関があり「ゲンカン構え」であったことが昭和46年の写真により確認できた(図37)。現在は茅葺き屋根を鉄板で覆っているものの、形態は当時と余り変わらない。



図36 D家主屋外観



図37 D家主屋外観 (1971年撮影)

5) E家

庄屋の家柄で、大正時代から酒造業を営み、大きな敷地内には酒蔵や煙突が残されている。

主屋は敷地の中央にあり、その周りを門や納屋などの付属屋が取り囲む(図41)。主屋の間口は9間に、半間の内廊下・濡れ縁がつく。奥行は6.5間で、東側に間口3間×奥行3.5間の「シタノダイドコロ(カマヤ)」が別棟で接する。平成10年の火事で茅葺き屋根を焼失し、2階を増築し下屋の瓦を葺き替えて現在の形となる(図38)。右勝手に、現在7部屋ある。大黒柱は180×180。「ナカノダイドコロ」の

上部には、女子衆と男衆用の2つのヒロシキがある。東側の入り口の横に灰屋があり、かつて使用人が多く灰も多く出たといわれる。



図38 E家主屋外観

6) F家

かつて藍商を営んでいたF家は、吉野川の堤防近くに位置する。敷地は広く、中央部に庭を設け、主屋は敷地の中央やや北寄りにあり、主屋の西側には藍寝床、東側には離れ、南側の道路沿いに長屋門が配されている。離れの位置にはかつて藍寝床があったが、老朽化により取り壊されている。

2階建て瓦葺き切妻屋根の主屋は、間口8間×奥行4間、左勝手の変形四間取、ドマ廻りを一部改造しているが、「ダイドコロ」には井戸やカマドが残されているなど、創建当時の姿をかなり残している(図39、

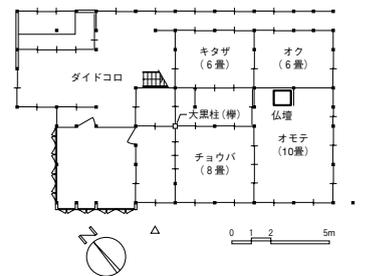


図39 F家平面図



図40 F家主屋外観

40)。建設時期は、聞き取りより江戸末期の建築と考えられる。

かつては「ドマ」部分に「ヒロシキ」があり、女衆の寝室になっていた。また、男衆は長屋門で寝ていたという。家族は「ダイドコロ」「オオナカ」「オ

ク」で生活し、「チョウバ」「オモテ」は接客のために利用されていた。

「オモテ」の南や東側には立派な庭もあり、2階建ての主屋、長屋門や藍寝床のある屋敷構えに、往事の藍商の力を伺い知ることができる。

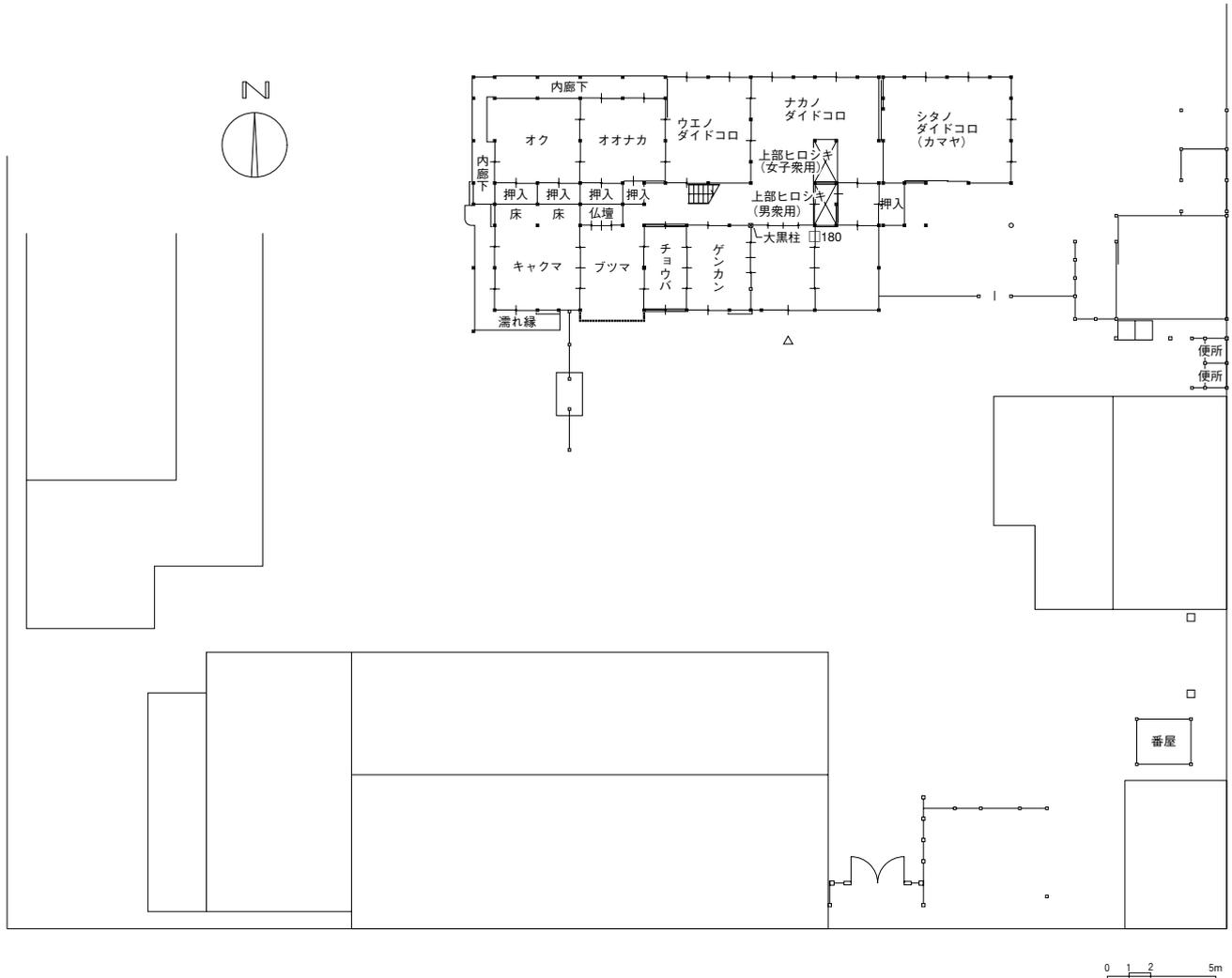


図41 E家配置図

8. まとめ

今回の調査により、藍住町内で確認された茅葺き民家は59棟と予想以上に少なかった。徳島市に隣接し、町内全域が都市計画区域の無線引き地区であることから、市街化が急速に進展していることや、徳島自動車道の整備により、周囲の民家の建て替えが進んだことが影響しているものと思われる。そのため、建設時期や大字別の特徴を把握することはでき

なかったが、茅葺き民家の全体的な特徴として、以下のことが明らかになった。

間取りは殆どが四間取であり、屋根形式は四方向が多い。また、奥村家やF家のような裕福な藍師の家では、江戸末期に瓦屋根で2階建ての民家が建てられている。これらの特徴は、「阿波の民家」で示された吉野川中下流域平野部の民家の特徴と一致する。

勝手の位置は右勝手が多い。これまでの調査により、同じ吉野川中下流域でも、石井町や旧土成町等

では左勝手が多く、鳴門市では右勝手が多いことが明らかになっている。鳴門市や藍住町で右勝手の民家が多いのは、県内東部に右勝手が多いとされる定説を裏付ける形となった。

玄関構えが現存する民家はなかった。しかし、D家の古い写真では玄関構えを確認できた。また、E家には「ゲンカン」と呼ばれる座敷があり、接客のための玄関は、他の市町村同様、庄屋などの家柄で設けられていたものと考えられる。

部屋の呼び方で特徴的なのが、「キタザ」「ミナミザ」である。これらの呼び名は対で使用されていることが多いが、殆どの民家が南面して建てられているため、南北の位置関係で部屋の用途や機能が理解されたことにより、広く使われるようになったのではないかと思われる。

建設時期が判明した民家が少ないため、時代毎の特徴を明らかにすることはできなかったが、最も新しい茅葺き民家が終戦直後の建築であること、昭和30年頃から茅葺き屋根の上にトタンを覆うようになったことが明らかになった。そのため、藍住町では昭和30年以降、茅葺き民家の新築や茅の葺替えは行われなくなったものと考えられる。

かつて栄えた藍作が、屋敷構えを特徴付けている。地形の制約が殆どないため、矩形で比較的広い敷地の中央部には、藍こなしなどの作業のための庭が設けられ、庭を取り囲むように主屋、藍寝床などの建物が配されている。藍寝床が解体され離れなどに建て替えられる場合も、この敷地構成は変わらず維持されている。

藍作と関連する付属施設である藍寝床のほか、灰屋を確認することができた。先述の通り、県内でも珍しい石造建築物であり、集落内に点在するその姿

は、藍住町に独自の景観を生み出している。

かつて相次いだ吉野川の氾濫は、民家にも影響を及ぼしている。先述の通り、敷地は青石などの石垣により、周囲の農地よりも高く造成されている。また、主屋の床も高く仕上げられ、入口部分には石の階段が2～4段ほど設けられている。それでも、大正元年の大洪水の影響は免れず、多くの民家が床上浸水の被害に遭っている。中には、地盤面から1mほどの高い位置に浸水後の痕跡を残す民家もあった。

9. おわりに

既に述べたとおり、市街化の著しい藍住町には伝統的民家が極めて少なくなっている。瓦葺き民家は奥村家が町指定文化財として、当初の姿を残しているが、茅葺き民家は店舗として利用されている1軒を除き、内部・外部ともに改造が進み、当初の姿を残すものは殆どない。

今後とも伝統的民家は減少することが予想され、資料保存など何らかの対策が求められる。

文 献

- 藍住町教育委員会（1965）：『藍住町史』藍住町。
 藍住町教育委員会（1985・88）：『奥村家建物実態調査報告書』。
 （社）徳島県建築士会 阿波のまちなみ研究会（2000）：『土成町の茅葺き民家実態調査』。
 （社）徳島県建築士会 阿波のまちなみ研究会（2001・02）：『徳島市の茅葺き民家実態調査』。
 （社）徳島県建築士会 阿波のまちなみ研究会（2004）：『鳴門市の茅葺き民家実態調査』。
 （社）徳島県建築士会 阿波のまちなみ研究会（2005）：『石井町の茅葺き民家実態調査』。
 彰国社（1976）：『建築大辞典』。
 奈良国立文化財研究所・徳島県教育委員会編（1976）：『阿波の民家』。
 日本民族建築学会編（2001）：『民俗建築大辞典』柏書房。